

コロナ禍以降の日本人の身体観の変容

－雑誌 Tarzan の分析を中心に－

田中安津子（広島大学）

1. 目的

本研究では現代の健康雑誌において支持を得ている「Tarzan」を分析することにより、コロナ禍以降の日本人の身体観の変容について考察する。分析において、東洋的身体観に着目し、それらが雑誌においてどのように記され、語られ、そして日本人の身体観の変容に影響を与えているのか、考察する。

2. 研究方法

文献研究：先行研究と関連する文献を検討し、本研究の理論的枠組みとなる「身体観」や「東洋的身体観」という概念について整理、検討する。

雑誌分析：次の通り、雑誌「Tarzan」の内容を分析する。

- ・雑誌「Tarzan」のタイトルを整理。また、その内容の分析を行う。

- ・雑誌「Tarzan」の記述における東洋的身体観の取り扱い方について記述内容から特徴を分析する。

対象期間：2019年12月26日～2023年11月9日

3. 結果と考察

文献調査よりコロナ禍以降の身体観の変容における仮説を立て、検証を行った。

<考察>

①コロナ禍以降、ボディメイクなどに関わる筋トレに関するキャッチコピーは依然として注目を浴びつつも、減少傾向にある。内容的特徴として、筋肉の部位ごとへ焦点を当てた特集がたびたび組まれており、わずかな差異への注目と考えられる。

②雑誌分析のメンテナンス系にみられるようにコロナ禍以降心身の調和を目的とした言説のタイトルの割合が増加している。具体例として、ヨガやピラティスといった特集がなされている。それら

が非正統医学の現れというよりかは、正統医学と混在し、相互に補完する役割として雑誌に現れていることが考えられる。

③東洋的身体観に関する記述はコロナ禍以降の健康雑誌「Tarzan」の中でも取り扱われていた。食養生に関する特集、貝原益軒と養生訓についての特集がなされており、記述内容の特徴として、生活の中での実践として取り組むことが比較的容易な記述がなされている。表象としての身体ではなく、身体のはたらきとしての関心が見られるということが考えられる。

④snsの普及により、「生」の実感を失いつつある現代において、「生」を実感するものとしての健康文化をはぐくむ上で、養生をはじめとする東洋的身体観に関する思想や実践が意味をなすことが考えられる。

4. 結論

本研究では、健康雑誌を分析することにより、日本人の身体観の変容を考察を行った。現代社会に蔓延する科学知に基づく健康実践や他者のまなざしに規定される身体観への問題点が顕在化してきたコロナ禍以降、文化としての健康が再び人々の生活の中で「生」の実感をもたらす健康の概念として役割を果たしうると考えられる。そこで重要となるのは、東洋的身体観をはじめとする地域やその風土思想に基づき知恵として伝承される健康文化の存在である。それらの思想的特徴の影響により、実践を伴う健康の意味合いが、人々の間にも理解されていくことが期待される。

5. 主な参考文献

瀧澤利行, 健康文化論, 大修館書店, 1998年, 78-81, 178-185, 216-225.

湯浅泰雄, 身体論, 講談社, 1990年, 357-363.